

PHP

©PHP研究所 2018
平成30年7月10日発行
(毎月10日発行)第843号
昭和22年5月19日
第三種郵便物認可

No.843
定価205円

8

[特集]

苦しいとき、つらいとき いい言葉で、前へ前へ!

●半藤一利、夏井いつき ●カンタン! 快適睡眠術



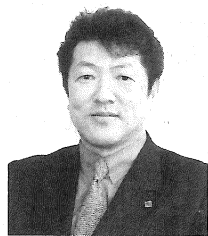
仙台を世界一災害に強い都市に！

今回紹介する取り組み ●(株)深松組・深松努社長の体験と教訓の伝承

いつか起こる災害に備えるために、大震災の実体験と教訓を伝える人がいます。

「社員や家族の安否確認は怎么样了か」「津波で流出したものの、形の残った個人所有物(家屋、家財、車両等)や、その下に被害者がいる場合はどう対応したのか?」

「Q&A 役に立つ! 災害廃棄物処理の初期活動」という冊子の質問の一部だ。発行元はせんだい災害協定団。災害廃棄物(以下、「がれき」)処理の初期活動の中で、震災で得た経験と教訓についてよく聞かれることを、Q&A方式でコンパクトにまとめた一冊だ。大震災では膨大ながれきが発生したが、地



「とにかく命が大切。まずは逃げてほしい」と、深松努社長は熱く語る。

元の建設業者、解体業者、産業廃棄物処理業者が市と一致団結して迅速

に処理したことで、国内外から高い評価を得た。地元の三団体が相互協定を結んでがれき処理を行なう、世界で唯一といわれるこの手法は、「仙台方式」と名づけられた。

仙台藩祖・伊達政宗公を祀る青葉神社の近くに深松組がある。代表取締役社長で、震災当時、仙台建設業協会副会長を務め、がれき処理を先導してきた深松努さんを訪ねた。

「仙台市では、約九百三十人が亡くなりました。建物の倒壊で亡くなった人はゼロです。

津波から早く逃げれば、助かった命もあるから悔しいです。日本では、どこにいても災害が起こり得るので、震災から得た教訓を今後の備えとして伝えていきたいです」

仙台建設業協会では、災害時には応急措置に率先して出動する協定を結んでいる。避難所の耐震診断をしたり、自衛隊や警察と一緒に

震災当初は、行政の縦割りにによる弊害で混乱したが、窓口の一本化を促したことで作業が迅速に進んだ。がれき一つにしても可燃物、不可燃物、リサイクル可能物と三つに分別し、

三団体が連携して分別搬入。がれき損壊家屋等の分別撤去は、さらに十九品目に分けていった。

「百ヘクターの広大な仮置場を確保するこ

とができ、八割ほどのリサイクルが可能になりました」と、深松社長は自信をもって話す。とはいっても、日常の仕事を抱えながらのがれき撤去は、心身ともに疲労困憊する。ご遺体に遭遇することもある。自らも被災者である建設業協会員のこの仕事は、三日交代が限度だった。七年経った今でも、PTSDの後遺症を残す人が多いという。「それでも地域の建設会社は、震災時は、救急救命医と同じだと、使命感を持ってやってきたのです」。

実体験をもとにした深松さんの講演は、百八十回以上を重ねた。今後の大震災に備えておくことは、①家族分の食料(一週間分)、②車の燃料は常に満タン、③家族との待ち合わせ場所の確認、を挙げている。

「日本中、世界中からご支援をいただきました。経験と教訓を伝えることで恩返ししたいと思っています。そして、世界一災害に強い都市を次世代に残したいですね」



●初期期でのがれき撤去作業。建設業者、解体業者、産業廃棄物処理業者が団結して処理した。